玉葉抄

ホ 2
5319

門 ホ2
號 5319
卷

早稲田大學圖書館
昭 34.6.22 受
藏書

藏書

序

おうなうたうまぬるまゝに。人のこゝろを乃言の葉もやうゝに花をれ川のうハぎきぬる大とい。久米乃ぢう山さゝにしゝを次河ハ古ふ風じき物うち。ほふ心のゆゝしぐおまるゆゝるハ河も心茂風じうそ。ほうひざ西のうゝれる彩ど。

歌詞文詞は集うる所集此物語うる所と
のごとまと異なれ乃ちに言こうれ
て一ッ松一詞も一やうあらぢさはまくう。
ちうれ言葉づかひ遠者ならうてハ。
いよく言葉づかひ和やし歌言の
葉たいとやうあるをさはなどうち
まじまて。よみ出る歌よもうき出る

文よも萬葉えぬたとぞもかぎ多
うう言るそも言の葉の道ハうは
いしまこうやぢやうあるを古をたいとあ
らひまよぶべ者まざかも今の世のや
うに心詞のさとあやし者をもえち
ぢぢて歌文のこうやぢを好むハ。ゐらくハ
花月のなさけを言うで。うれゆく

春をしまちがいと〳〵吾師の云ごと〳〵
ごろ此ろ紙染〳〵欲求てさ求よ河
の玉乃流をよつまとて結へさ〳〵てにをはの
こゞまこを結らめ結たさこゝ又結大石よ
りひまとくる磯の志てみ為こるを正
し山崎よりなてふまゞら結よゞれるを
直さをとて吉〳〵て結ふ樫の板やの

此玉ゆらもよいかのわ結いをと求人ハ
こをとぶ名のさ〳〵たどろ求てむを結い
ぎさ結〳〵て耳も心も秋の田乃ま〳〵
を結稲の杙そらゞ乃人ハ乃ふら乃
海のいゞぐさ結いゞぐハせもい高陰らゞ
為わはの結泊の玉結と結玉乃らも
と二門の吉ハふ為ふ結ふ結結波

浦淺香山と父母のやうにそれ海山の
るくなつかず涙くもの心いくろうろう
ひまなく能の事どもしきをも思ひい
らつで筆のいくまにたこなき言ど
を書きつくせ。

三井高蔭

玉ぐしの末

まなびの道ふ考しるして

おらがうさぶやに見ぬ松を

有がつれ清代のそくさはつくき乘の道ゆくやうにて。若
のまなびのそこしもやうくふかくときゆるこころひあるに。
形ふかいぶつれも咲ぬよりの人のいぶこさをしりて。そもい
うかるかぞや。高洲も文をも古れをばよくもえぶてしぶち
かき世の人乃抱をるふのをかづひあるへむ学かし。そもく近
きよの人のかの世ふをハ古りにへをやるぶろや。よくかむ
うへよれあきぬよくるれまへくこそ。形ふひろべきろぶ形
るふ。ちるんもなく。みぐるをふ見ぶにあるひて。世をふうう。

よかるべき詞えもいはぬ心がちなるべしとも世ふるの名称くゝろごろて。
ちぐさなりることのはとなりきいとかなくいふ紀ぶるおむを
りなん。そもそも今こそ物知れる人まれなめれバよきもあしき紀
を。ちて侍ぎをつべ侍。今ゝ後いよ〳〵道ゆきもむかご
の学ぶ人乃いとよく見ゝるなむもいとをづり紀るざなるべし
や。のゝ名なが近きよの世ゝろきくせを学人どもはさとえさ
ゝゝで〳〵よ〳〵世ゝを思ひまるがかゝもゝいふさふそを侍おど
ろきはゝりて。考ふみく侍をゝるゝもおもひ学ゝ
ふこを侍をゝと書出ゝく。いゝゝゝづゝちぐ先いへ見ゝりゝせること
ゝかいと多ゝる紀。そはゝを物ゝゝへゝゝ心ちゝをねゝゝと
ぞ。ちかき世ゝゝゝせゝゝは。古一代系を侍後のをいゝ。ちゝ侍ゝ

中ごゝ紀ゝゝ新続古今集までゝゝ奇ハ。玉葉風雅の二つの系
をのぞ紀ゝくハ大ゝくハおゝゝゝ。ゝゝ侍ゝ。おとゝゝゝろきくせもえ
えざ物ゝ紀。ゝ後ゝ物ゝてゝむいゝゝいゝ〳〵へとハかりて。ゆ
物をゝこゝぐを侍おゝく出ゝゝできつをバしちをどえさゝ
の学ゝゝうへゝゝゝゝゝゝ紀人ゝの名何ゝゝ侍ゝかゝこ。侍ゝ
ゆゝあゝこと物ゝべゝを侍バいやしきゝ紀ゝゝがうゝ紀ゝゝべき
きはゝかゝゝ紀。今ゝをふちゝめいふゝ。ゝゝかのゝ紀ゝゝ物
みゝゝ。下ゝゝ乃ゝとゝぞ。よ。

本居宣長

□みの部
□ふのひ
□何の部の下ふやりをおくる 同
□そ〻ゑる上の格 七のひ
□てりくらべぬ法 同
□りそ りてそ 九のそ
三つのいひざる 同
□そひそふ そへ そふる 同
□まかひ まかふ まかへ まかふる 十二のそ
□かそる かへ かそる 同
□ほ 同
□や 同
□ほりしらぬ俗 八のそ
□なりしらぬ倍 同
□きそ きそへ 同
□つゆ しらる 土のそ

□ふる ふて ふせて 同
□ぶ さへ さる 十三のひ
□ぶる 十四のそ
□いる 十五のそ
□やらぬ 十六のひ
□そても 十七のひ
□経 舊 同
□ちふ 同
□いふ 同
□ぐる 記 十九のひ
□ぐべ ぐき 同
□ひぐ ぬる き 同
□ぬのそ ものひ 廿のひ

そがれある　同
そがうみ　同
ほつの海　同
そらと　本二の部
産の面　同
ゆびそ　同
ほうする火　本三の部
ひとり風　本四の部
義楽して　同
そうし　本八の部
紙よりひ　光やうく
ちぐ形る　本二の部
天が下　同
がひ風　同
生りせ　産りせ　同
みぎり　同
こさら　同
寒をむしる　同
中に　同
金もかも　ふもかる　同
寒やきぬ〳〵ん　同
ちとふまつ　同

みゝふ河を見のまふいひしる　本六の部
嵐のいひ　同
夕ばいひを　同
ちさく　本七の部
文の紙を方にしむる　本八の部
文の紙用語
そま　本二の部
りの形し　同
菜がしる　本三の部
人の名を指ていふ
菜形ある菜　本五の部
大君　同
いふと　同
二つの年三つの年　同
あのもと菜　同
菜形る者　本四の部
友かき　友ぞち　同
かと　本六の部

[illegible] 同
[illegible] 同
[illegible]
川をこえ 同
[illegible] 四九のひら
[illegible] 四十四のひら
きこゆ 同
[illegible] 四十二のひら
[illegible] 同
[illegible] 四十五のひら
[illegible] 四七のひら
[illegible] 同
[illegible] 同
笑ひ 同
いさほし 同
かいつぶり 同
[illegible] 五十一のひら
[illegible] 四十三のひら
こゑ 四十四のひら
[illegible] 同
[illegible] 同

[illegible] 同
[illegible] 四十六のひら
[illegible] 同
[illegible] 四十八のひら
[illegible] 同
[illegible] 四十九のひら
時代のゆりもあげび 五十一のひら
[illegible] 五十二のひら

みの部

み

月清み。山高み。雲高み。風をいたみ。露をおもみ。瀬をはやみ。など
のたぐひのみハ。本体のことを多くいへど。袖ぞ干す年にまさるひぬ
べし。さて近くいへど。月が清さに。山が高さに。雲が高さに。風がいたさ
に。露が重さに。瀬が早さに。といふことをかねしハ。ちるも明きも高
き同じ。近き世にある人。此みりしのつかひざまを忘れまへだ。或ハ月清
く月清きなどいふべき所をもみだりにみといふこと多し。心すべし。

志

やをも何の志りしおきざまなしきハいと安ぐるしれ捕らちつき
学ぶ者に。道しれる学。などおほくよむ。これら道しれる者ハと

いふときハ。志りし優なる代下をしるといふことにおきてこそこ
ちなく聞ゆれ。詞もこれにならへてまれまぶべし。すべてかや
うのすぢ。古の書をよく考へてつかふべきこと。

に

近き世の人。春にのどけき。秋にさびし。などおほくよむ。此たぐひ乃
春に。秋になどいふにハりいといやし。又意の書に。人まなかしき。
人にすぐれたき。人ようれなどいふにもいといやしきなり。

や

花や紅葉。又梅や柳。などいふやりハいやしき詞也。これハのを
蝶や花やなどいふ。それ蝶よ花よといふと同じことなり。流
れよやりし下にもちかり。桜や紅葉などいふハ。すこしはあ

らで。花又ハ紫といふを略せバ。やもじかもじハなかるし

何の詞の下にやもじをおくこと

なりといふいづれいくなれなどの下にかもじをおくことつね

なりとそハなふいづれかなれなどやがてつゞきてもおき。文中に詞をへだてゝもおくべし。その続きておくかもじハ今の世にもまゝ語添てハあまたを中に詞をへだてゝおくかもじをバ語りてやもじをおくこと多し。たとへバいかならでたのしからん。しかれたのしからんなどいふべきを。いかなる人にやあらん。誰にやたのしからんなどいひ。又いく年月をかへぬらん。ながさとよりかきならんなどいふべきを。いく年月をかやへぬらん。ながさとよりやきならんなどいふ。かやうの類のやうなる語ならでも古の文を見てしるべし。大かた今の世にも。歌をも文をもよくよみかくと思ひたる人も。此語をさまぬる人ハ多くなし。但し何すぞといふぞなど。ぞもじをおく時ハ。其下にかなといふ事なし。其の下ニハ。いふぞやなどやもじをおく事ありこれハ疑ひのやもハたがへ。よに疑ひて。いふぞよなどいふ語ト意ハ別なり。又いづれやいふやなどやなどいふやも疑ひならねバ。ぞやのやのやし。これらと思ひまがへて何やまたとなる也。

やもじかゝる上の格

まへるといふ詞の上の定まり。定まれる格あることなる例。今の人乃つゞきがらハいとみだれたし。定まれる格とハ。花さきぬらむといひ。鳴ぬるらむハいかにぞ。花さきつらむといひて。咲つらむハいと

ぞ。散行くといひて。ちるゝハいへれど。又行りともといひて。あ
流るともハいへれど流るともいひて流きともハいへれど。行もなびの格を
も鏡の右行と中行とを出ていくく紛らはしくて。其の上乃
文も。皆右行の格しこゝにもよく古人もおのづからよく心得たりき。
まさしく謬ることハ古りしいたりけれ共此人まで近世とゝなへ
ぞ。みだりに流るゝ者のゝふも行るれば。文すらも道の記などに。紫山
をこゝとして流なども流にこゝもこゆるといふ格よくして行る。
述べる上の詞をうけてつゞくる其の格ハいづれの詞もこそ定まりあり
て。そのゝふハらぎられども。その上を結ぶ謬るて多きなるに此一つ
を出せるも。いづれの詞も古人乃例をよくえてつゞくべきし。さてと
もし。とこゝれとかれ二つのこゝいふ與のこれとハ。さる格でふ

きはのそくハたゞあり。詞の玉の緒にいへるがごとし。

流れじもならぬ語

なるとへバ。照りてならぬ。かゝる月。曇りゆく月日。照りどいふこと
を。袖学の事なてゝあ。かゝる月。曇りゆく月。照どやうにいふよ
むもて行るゝ。さてハ流りじならで語るのなるぞ。古集るハ。あかるなるといふ照あまりでは古その格
みでて後の例よ。いひがてし。さて又此照乃中に。流の行ると照きまゝして。自然の
きこれはかゝる詞もおなじことなるぞ。そく細といへぞ。細き人のなくこ
とゝなる細といへぞ。細のおのづからなるすら。又川 細といへ
ぞ。煙のおのづからならて。なつる煙といへバ。煙を人乃なつるこ
とゝし。袖学は文よハこれらのまがひつねよくなるとそ。

てりじならぬ語

かてとしつべき事なれば世おうぐるとバ後うれく世ぐるしく
ひろまりて花咲て人ぞそふふるとしつをはたらきて人ぞそふ
るといひてハいろ〳〵おるがごとし此ことばひまゝ人をべし又文ハかゝ
ぞてりぐをいろ〳〵しるべきことと多き世その事おるとも
いとひろく畧くてまぐ〳〵記人の文ハおりそハ中とかゝがごと
おるとたき畑後をぞを見べし必おくべきおるハいくつまうてもいとハ
ぞそうべておりるまや

なりぐ〳〵ぬ後

ふちかからそ畑多思ひそおるどいふ乱をりぐはおセの調ふ作ふる
はもふ〳〵ちからそ畑思ひそるどやふ〳〵おりぐをそぶくてちる
云ふをりく〳〵ふるハいみしき心ぐをし下ふるそを畧ふハ百柴ふ

どみハ多く作ぐどとそをも古ふ系よりこふるみハ乱ぞまて
おをそぶりる例をふべく字きてしこはおりぐ後のぞきてハぬ
ぬ畑ふるりおるまや

りぐ　りぐそ

しぐぞといひてそといふと〳〵りぐりそといふをハ言の畧おるこ
とふて〳〵柴はあ後ふいつるがごとし後近き人をしぐ日じゝす
とんはるふやぞてそといふべきそ後をはてハりぐはしふ之
はもをを保て〳〵ぞ〳〵そとよもきハとみぐらし

き　しき

終りをなきうきのどき春少紀を紀そうおき又うれしきふ
したさびしき遠しきふやしきふど紀ぶ此きをきハ上ふ歩の

や何の詞などのかゝりあるてにをはハ、なくてハそのとゝのへぬことなるを、近き
世にハ此格よからず、上よりのや何のてにをはなくして、きとむすべき
ことを結べる事おほきハ、いとくやしきわざ也。ちかきてぞ出来る。故にかゝる
あらむ人なきハ見てよむまじきを、おなじ結ふきの方ハ、正し結べ
ど、さりとも、あやまりたるを、ふたゝびこゝにきさと結ぶハ、いふぞや、よくはじめよりや
ん。よくゝゝらむ、例のいとみだりし。

詞に三つのいひざま有事

たとへバ花に咲く咲ける咲きし。ちるちれるちりし。雪にふるふれる
ふりし。鳥なくなけるなきしなどいふたぐひ、或ハ行ふ
行へるあひし。思ふ思へる思ひし。見る見れる見しなどいふごとく
ひ、大かたいづれの詞も此三つのいひざまによりて、いさゝかそのこと

差別ありて、花に咲くといふハ今咲て、咲けるといふハ咲たると
いふとおなじこゝにて、咲て有るを、咲しといふハ、おのづから咲しことを
にいふ詞也。かくのごとし。いづれの詞も是になぞらへて知るべく
べし。又咲けるといふべき所に咲くといふてハ、誤りとなる也。など
のごとし。これらハ咲るといふべき所を咲るといふまじきを
咲るなどいひしハ、たゞへもかゝるを近世人の、此差別を
よくしらずまへだに、前にも文の中にも咲くとやうにいふべき所を咲るといひ、さけ
咲きやうにいふべき所を咲きしといふたぐひの、いづれ
詞にも多し。たとへバ此時に花の咲く春なる所、いかにむかしハ花咲く
春といふべきを、花さける春といふむを、咲る春とは、その
花の咲る時といふ詞也。又今咲て有る花のこと也。咲し梅などいふ

とまりし。そハ過去とていふべき道理なし。さてハおほかたにすぎし
ことを後にいふに用ゐし文字にて、古人の加へる書いづる説などの
ことをいふに、今その書その説をよくへていはゆる事につきていふ也。されバ
さしかかるさしいづるといふべく、文字のくれぐれし書いひしもの
のことをいふにハ、さしかかりしといひしといふべし。しかしてこそ古今
集序をよくへてこれらをいはんにハ、此序ハ延喜乃比代の貫
之が筆跡なりといふべし。文字のむかし時の後いふにハ、延喜乃
御時に貫之の此序かきし時、貫之がかきけりし時などいふべし。
御代を追ふ人の述べしこれらのきざし見えて、古今集の序ハ
貫之のかきし文なれど、めでやしにいふなるもあらず。文治時の人乃
うへをいふに、行ふしハ前をよくよめる人にて、好ぐいふなるべし。

むかしにし。当時のことなれバ、なかばむかし人といふべし。よめる人ともいひ
てハよみたる人といふとはじめて、或は書ける人のことを、文治時の人
にても、今まで見たることにあらで、今といふべくとにもあらず。
今の人のかく文にハ此過去なる詞多し。されバ行道の詞も、右の三つのき
ざみをよくみわきてつかふべきなり。

つる　ぬる　たる

詞ふるくて下を、はるといふべきと、ぬるといふべきとの差なるなり。
とへぞ行とといふ詞乃下ハ必ず来つるとのみいひて、来ぬるといふ
ことハなし。見る吹も見つる来つるといひて、見ぬる来ぬるとハいひ
ちぞ。又ちりゆりなどハ、ちりぬる暮ぬるといひて、ちりつるゆり
つるとハをさをさいはず。又居る見ても見るるよれ詞も行也。

又つるぬるといふを。るすによりては。らるといひてよき所あり。なる
といひてよき所もあり。然るに近き世の人は。これらのわきまへをし
らず。みだりなる中に。流俗といふべき所を。ぬるといふるの類なほ
きこし。大かた神学の輩などハ。つるといふてきをば。なすげるが如くにて。
皆ぬるといひ。又ぬる所をも流俗といひてよき所をも。今の人多く
ハ。これを味ひしらねば。皆ぬるといふ。これら古体なるに心をつけて。此
によく見わけて。其例をしるべきなり。

そひ　そふ　そへ　そふる

たとへば露に。おきそひおきそふなどいふは。露のおのづからおき
そひまさるなり。（俗言にいへば。露が自身とひとりでにそひまさるなり。）おきそへおきそふるなどいふは。
他の物の露をおきそはするなり。（其の物が。露をおきそへるなり。）然るに近き世の人は。多
く此差をしらで。そひといふべき所を。そへといひ。そふといふべきを。そふるの
かく紛ば。そふ流といふもたがひなれど。いとみだりし。そふるといふべき所。
わづかにかくねば。古人のそへることをいへり。

まがひ　まがふ　まがへ　まがふる

たとへば菊の花に。霜のおきまがひおきまがふなどいふは。霜の色と
るが。おのづから菊の色にまがふなり。まがへまがふる流などいふは。霜のまがへ
あるなり。これをおのづから然ると。ことさらにしかするとを。いふなり。
差を行て。然るに近世人は。これも一つに心得て。誤ること多かり。

かはり　かはる　かへ　かふる

たとへば秋の来て風の吹かはり。吹かはるなどいふは。おのづからにかは
る也。吹かへ吹かふるといふは。風を吹かはらするなり。然るにこれも近き

学人は一つのみにて、ふきかえるべきなり。
かへくといふとゞひみだりし。又風ふぬきいふべきをゆゑのさ
らなるきは、吹いるゝといふ。是もほどく自化のようびあるを、程ゆゑ
むいと多し。於ちこゝにうるべし。上のそひをへよりとこゝまで、皆
自化の事なれば、是乃何もこゝ計ゆゑなれば、中ふ
つよふく人の唱るを、二つ三つさくはひうきうし。
それゆゑ是をて　是せて
是ゆゑ是をて、おのづゝふ和し、是まる是きて、
ものむるし。さへど風ふをの時、月のさやう明るしいるしふ
ふ是をてといふゝ。月のひやふ是をゝろのまをいふふて、
風の音ゝ吹ゝるゝ。ふはかりゝ。おのづゝ和るゝろをいふ何

なるを。そを是ゝ是をて、ふ是せて
月をひやふ是せゝるゝふ明るし。月を風ゝるや
ひゝくもよりきは、是ゆゑ是をて、ふ是せるゝ。月をゆゑ計ゝゝひ行方ふい
風是をて、ひゝ方は花やゝふはうゝとゝ。大やゝにしてゝおゝやゝし。是ゝ
ふ近し。物を近き人を。是ゝ是ゝ。是ゝ是をての方は多くぬむゝ。ふの
ふもむきふゝゝひてゝゝ。ぬべきし。
ぬふ　さへ　ゝゝ
ぬゝひは是をゝといふべき所をゝ。近き人をゝ多くぬふゝといふこはぬふ
をもさへをもゝをゝ。今の俗ふは皆おゝこゝきて一つふさへといふ
ふふさへをは俗と思ひ。ぬふをのゝ雅云のやうふんにて、其ふ雅云
よりて、ゝを差別いうて是ゝひるし。まづぬふはゝゝへは俗ふ

こそハかならずぞとせずてこそあるなどといふやうなる言に此へも此
るのかはりへに文は又なにもひとつ俗やうの言なり。ハやまり経
といふ言ふもし。御ふ古き集よりこれらハなきの言なきにもにも
ぶりといへり此バかくのことをぶといふことも多し。此へ乃
言也ぶといふ言俗言。称此三つの詞の此ひざ皆を猶んでありて
言かなきども。あくいえんにハいと事多し。まけ大かる古のごく
かられえて。たがふことなし。
まし
ましハ。ん文べきべしといふをもたる同じ言にて。せまし。ハせん文
なべきなべし。皆言。いそまし。ハいちん文にふべきいふべしの言。都
まし。歌をハ。なきん歌とも文。都るべき歌をの言なし。古今集のなうり

歌詠者より出たる詞多くハあらぬまじきれるものしといへる
言。なりるハちかきことはあるべきの言なし。俗言にいとど。これがなる
なり。うぞ御ふ今の世物学びのあまり。多くしを添りてまじきよみ
不の言とかなりてぞせとふことぞまじ。ぶりをいそまじみど
よむ也。いうしれむかちし。此詞りしすさぬるバ古の古き集の前
の結句みど。ふかきもあるまじといへバ皆しぞ。絶いひろくそい
といやしれ詞も。よくしうれまふべし。
俳
ちかれ歌詠人。どもといふべき所を皆ハなりぬらるなどハ。みだりふ
つといひ。文字てものの言あるをいとひて。つとといふぐ
む事し。皆むかしとしてもつくるのあなちきて。きこ言もきれぞ。

□清くといふべき所を、で□といひ、濁るべき所を清くて□と
いふべきを、つ□といひ、くはしく濁ることおかし。清く□は此事をし
らずして、かのすみたるすをもし。又此すなあるふかのすもおまじき添
やうの所なり用る詞にて、なかなかの玉緒にいへるがごとし。又文字
□その意なるをいひて、或はさぶき或は□つにかへなどしるし
すくにつるなし。此すは既に上にもいへり。

□なに

□なには、俗言に、□まづ、或は□さしあたりて、或は□やつぱりなどいふにかなへり。
なる所はよくといふ言に清ふも、後のことにて、それはなとへぞ、なに色
まつるなどいふは、かなたよりも色の、まづ。こちらへ、にもまさるこ
まろうるが、いよく、まさるといふに近く、字ゆるかやうなる所よりは[illegible]

ぎりてそれを捕ふべし。かくて、いよく、なきことに用ゆるも、もげに
近き世なるすにも、ちらば、やゝゆるくも見えぬれど、それは此よかるば
近世に、□いかなど□なると多くよむなどは、誠に笑ふべし。

□いく

いくは、其数の知がたき時、疑ひて問ふ言の詞なれば、上下の類に言を
そのならびなくども、此言を以てよむべきを、なるに、近世人は、らち多
きらし、只にて、いく千世などいふを、千世の数乃多きことに定めて
よむは、近かごとし。いく千世といふは、千世の数の知れざるをいふ
ぞかし。□千世ぞと問ふ言なるをや。但し、いく千世もなどいへども
まで数の多き事になる所も□といはでは、もとにかはりがたし。
こは今の世にいふ平語にても、よくかなへることぞかし。とこへ

ぞ日の数をいまもむかしくらしとといへば日をかぞへてまきてふるを
をとといふぞ。ぐいくらしのをれば。年数の初をぬを数ひてと
ふ河よりつゝびやこまを以てをべく。いくといふ。ためつゝひざるを
こゝにかえらくべし。

柚うゝ

此河を右かゝ系文。整ぶかたく星のうたとうたゞばうかうさまれ
ぬ四つふりのうゝ山下白を。信云よいへば。号ひきゝまゞ。そゝ。でも
うらまはるゝ。又号ひるがゝしもやっうゝくしくこハはるゝ。あゞい
ふきし。又秋上まつ人よりうぬ柚うゝ神名ゆ。ゆきゆ。ゆのをづし
きゝれや。独二百ハ。まつ人でハゝをゞとといふきし。又柚ゆうぐき
ゆ一なゞきゆつをそゝ。ふうひをゝ身をバをそぬ柚うゝ此結白

ゝ。捨もせゞふぬゝゞゝといふきし。大うゝをゝゆ。ゝをゝ
ゆゝゝゆゝ。ゆゝを今号の人をハふんゆゝふゝ四ふゝゝいふ
べき本を四ふゝ。ゆゝゝゝいひうゝぬ。ふゝいふべき。ゆ。ゆゝぬ柚
かゝといふゞひいゝおかきハゝゞかゝいふゞはじをゝひ
保ゝゆゆをゝ。ゝゞかゝゝ柚うゝとハゞをゝうゝうへのゝゞひ
うをゝやゝをゝゝ山河をゝゆ。柚俗の河ゞどふを。ゝふかく
尺てをゝまゞゝべくもうゝぬ河ゝに。ゆ号ハゝをゝ文をゝよく
ゝかくゝ四ひゞゝ人ゆ。多く此ゞてうハいゝかゝとゝハ
ゝをゝゞゆうか。

やらぬ

ゝゝへゞ宮の消やらぬといふハ。ゝふをゝて狂ゝをゝふ。言ゝをゝく

きえよかしとは思へども花のくきしぬる花乃咲やらぬといふもの
くちけうとくまてどもそこのおそきを花をけやらぬといふ
をだまくゆもといそぎどもあがどえゆうぬやらぬまふてやら
ぬハ皆かくのごとく物を近き人をこまつの枝をもつて書乃き
えねこと美のさうねてこをゆるこくのこんはるまや或ハ花乃
まどちらでいるをちをやらぬといひ月のまどいるぬを入やら
てなどよむ軽美きハえがてもこまてハ花をおくちをかしと形ひ
月波そこへきうと形ふうをふちるをや

まそこ

花ふちをまそこといふるおちくくこて行こと物を形きこと
意の方形どふ絵をてといふる金く絵ていくかとかをきこと

をべくまそこハたのかきをとをいふべき時ふ形る何ある也近き人ハこて
義て絵てとのこいくよ花そ物をも何のくく絵ハちるを
てくふんまそこよむる。まくくといふているづくかと

まそこも

いつをまそこも形くまそこもなどやうかそこもハこて てふをはの意
ありくる形をバおとも形きを後をハびてふをハあハうこで別り
一つの泊ふくて。そこもそこくくふてくる。後をふとてものてふをそこもか
あハなどいふをそこもとおくと。
いくやくぎしこ方形どによむべきこばようこぞ。

やがて

やがてハ俗をふそのまくでをぐあくいふこと。ふとへだ春の日乃
いくく庭ふるがそのまくでをぐふ春ふるを。霞める空のやが

てをあらはすといふことばし。物語は近き人は、猶なほ近分といふことばもあり。俗言ばかりのやうにてをあるも。近分をあるなるべし。

きゝはうゝびに思ひまがふべうゝびたのもの文よりきゝにいつゝはなり。

紙　舊

ちかき世ふ紙ゝ書とまきれるゝ。誤もうゝかゝ。ゝあくへで年ぬ

ゝとてといふは年久しくて。舊ゝかりゝとゝふて。年紙てといふと

も異なる詞なるを。ふるを紙と一つゝ心はゝるゝやへてといふべき

をすぐのゝゝねば過りてゝふりてとよむこと。むごとし。そべてぬる

くかりゝるゝかりでは。ふりてとはいひがゝ。舊はかりぬるとゝる

ゝき。紙へふるゝとゝきて。ふりとはゝゝゝゝる詞し。されば

月日などのふる日数の紙ゝと。雨の降ることをかぬていもしよる日を物

ふるといふもよし。日を物てといひくは日数を紙ることはかりが

ゝゝと知べし。

うぶ

うぶかるゝとは。花のちるとやゝ。はれ消やゝ。或ゝ人のゝのゝうつ

るやゝ。花などに消やゝ。詞なるを。近き人ゝ。月日をうぶふるとかぬ。

いうぶゝふゝいふゝふつゝ。むがふゝとし。

ゝふ

近き人のゝみは。ゝふゝいふまゝ。ゝふとよむて。ゝ。

ゝは。ゝふゝのぶなどいひてよゝ。ゝふ

ゝいふゝとは。詞は。古ゝにあるやうゝ。ゝへゝつふべし。

むふ

むつぶとハ、まどしく物にたし対ふ時用ありてハ、いふまじき
こと好むる近き世にハ、花にまれ月にまれ何にまれ、しかども見るといひ
てよききすをみだりにむつぶともむつましき時に多きハいと嘆かし。

いうぶ

いうぶる歌よりまさ事にまさ、其を心にきろしめてこそ好むるに近世
にハ哉る花のちるをいうぶ、人のとハぬをいうぶなどいふ類どもへてうし
と思ふことをバ皆いうぶとよむぞるがふすおかし。

ゆのうき

これハゆのうしとうたふべき詞の格なりしを、神楽の峯まで耳だちてきこしふさくさむとぞ、今の世の格なきとハあぎるしきべくはきびひ皆統抔此書ハかゝる詞づかひの誤をしるせしてかゝるハ好ぎとし抑よくえうむ人のとがむべきふよりてかくハいふし。

ゆのうれるを、俗にいふぶせうにて何すれもせよ、ゆるてのいやあるき。
ゆうとも好きといふまことを近世人ぞうれといふと一つにしし
まふや。うきといふべき所を、此詞をつかふハあまりにうきといふ詞
どかつばた古き集に梅枝に抱きうきなどぶちら宮城と行るとも雪の
むらしとハ鶯でなくでいきかづちる波いづるまで俗にいやきこに
あられとふあまりにふせうぐにふるといふ文かのうがるきに言
の好くしよそろもいやきこにおきしともあまるまま好にあくしといふ
とししこそふにてしんぬべし。

らぐらしき

うらはぐらしきハ物語に多き詞にて、俗に気の毒なといふき。又物の
気きりしく案じらるゝといふもこし、然るを近世人しげらしきこ
とふつかふなるがうる。

思ひぐる好き

ことハ後ふ思ひやりとの於いとゝいふまし此何も和語よりまして。ふるゝハ。
後撰集恋三いづるふ之ゝ[illegible]つゝえよりそゝ思ひぞ[illegible]人乃な
をゆく。上句ハ[illegible]といふ句の[illegible]此下句ふそんひへゝおもひやるも於く
はるとまく於らゆくゝし。絶るを近世ふ思ふるゝ[illegible]人のとそゝ[illegible]ふもむ
まるぐつゝ於ゝ。ふ載集後撰新集。おもひぐる於くてもゝ年のへやゝう
於和いひゝ世秋の夜乃月。こゝハとがんをいひく。思ひへぶつゝんの心毎
も於きよりゝ絶ゝバ近き世ふよむことふちゝ。ちとどみ年ごろふ
なるとてゝんもゝそゝ。猶月のうとくゝしを恨まゝ。思ひやりとのゝたこゝ
よゝいつるやゝ[illegible]れもきとゆるをや。

くゝべゞゝ[illegible]れ

ことハ人のゝの於ける[illegible]とがゝて。交ることふくきことふて。俗よつき

ひふくい。おどいふかどのてくれると。絶ることを近世人ゝ和のをくるて
ふれゝ[illegible]ふゝ。ゝゝへど。ゝれ於ゝもくゝべゞゝ[illegible]れおどやゝに。
くゝべゞゝ[illegible]ふ月ふ。[illegible]ゝ。たゞ上の和。きゝちふきゝで。
いづとも和俗をゞふ。をきゝ和ゝをいづとゝとゝの古人のたゝひゝゝや
ゝ[illegible]ゝくも考へゞて。ゝゞ[illegible]の和のゝるふつきて。おゝ[illegible]ふ和ゝ
きハ和のゝ[illegible]て。ゝゞゝきハ人のゝゝゝ[illegible]てゝよゝやゝふ。ふゝよそ
ふゝんれて。みゞゝに用ゝかゝ。いゝゝゝ。ゝがゝるゝの毛きゞゝ。ゝと
ゞいづとの和も。近き世の人のゝ。ゝ人のゝゝ[illegible]ふハ世ゞゝゞ。古の文ふつゝひゝる
ゝ[illegible]ゝ考へゝゝつゝふべきゝゞし。

ゝの毛　ゝのゝ

ゝの毛ゝのゝゝとハ人のゝ[illegible]を形まゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ形ゝと

いつはりこうるかうるはうるはしくもくバ人の今東まうんといふまきてまぬをいるのきてこぬといふまそんはべーれませてたきてまぬしまた人ぶのめといふも人を れませておきてさもいうぬるとしはけ人をだうるようふ人の金はを人どのそんうるふるこて有きまてくいふき金といふ為はバ定きてゑべきぞと れをふきてゑ

はてを金すハれきをいうる。これうるべーれをを今れ人ごうるようれむとれしゆのきてこのれををどもむハとぐうる。

とるれかをる

きるれかるとハつうるふるくるれうれるといふれるに迫ゑ人乃ふれかれるれ代をどもむを曲ゑるれく正しく直きこと ふるゑ。とぐうる。

きぐれる

曲らげ直きこと代。きぐるる。

ゑれ。ちくハはるふるしぬるくれるを迫ゑふるきぐるは代をどおゑ

くるむハいふるゑ

そのうみ

そのかをるハゑるーゑれ事代いふ語の中ふ上をうをて。ゑ時とさ

ーそいふ何きるーるるくるーれ事をるーふそのうるるくるるる

ちるくのるれをるーれをいふるれるを止ゑるきるるるなくて。

るげるるくゑるるくいふるるる勇ゑるたげうる。

天が下

むるーハ天の下るのるるそいるを天ゑ下るいふる後の号れるゑ。

これらハむかしいふべかりけるにもあらめど。古ハにしへにこそ
あれ紫乃道あるを今の人んつかぬぞ。ぞゝ下ゝのといふ成けり。
おぼつかなくおかしくなん。

四つの海

此門の海といつゝてハやゝゆるくとおもしかれど。むかしより古への方
文字ハ多くハ此頃の海ともそいへど。四海（シカイ）といふなれども四方乃海
といふごとし。四つの海といふことあハかゝれば。四つの海とてハ海の四つあ
海ならぬ説あるぞかし。

あひ風

あひ風ハうしろより方より吹来る風也。船をたすけてゆく方へ
ふく順風をいふ事也。おもふべし。然るを梅の方なとよむハ梅の花乃
方より吹来る風を梅のあひ風とよむなどハいかゞ。

そとも

そともハ日本紀の成務天皇の御巻に背面（ソトモ）と訓るごとく。うしろ
のことなるを。後世にハ外面と心得てよめる。むかしことハさのことが
ゝるのたぐひ。そらいふ詞もいやしくなべて外をバとゝてそい
へるといふてハいやしくかはるといふなるむかしにも侍るべし。

野らせ　座りせ

堂りせハ堂をも狭きまで物のみちみちてあるを。座りせハ座も狭きまで。
うちかさなりてあるをいふなれど野ら座らといふてを。堂らせ座らせに
とよめるもむかしより。それハ上を面のことゝ心得たるにや。されバせわし
きなど何のことかとうせむ。

座ぶとん

ゆゑ座ぶとんとは紙にて紙をうを座の面とするなり八面にいろ
〻用ゐ又ゐかうてハさゝめ〻げたゐわるを仏もべし

みぎうと

そゝ部りもなく用をなきに御とゝもして追号ゐ多し いと

そぐそ

そぐそハ掘字を書て記しき戸のほそし結るを業ゐ戸ぐをるぐ
〻ぐ戸のこゝふゝもハいぐこハやゝ巻るき多ゐもしてこれぐ仏ゐなくべし

あを

簾をこをゝいふハ俗ゐ代追号ゐ分ゐ結ゐ多くゝもいゝ俗さ
〻そハゆゑ古き書に小簾とゐて書をゐを後ゐ俗りてゐ

をゝようみゐ〻へるゐつきて俗ひよゝ別ゐ字代あて鈎簾と書
ぐと鈎簾〻ゐ名ゐ好きゝゐるをや

なるる火

螢を独学ゐ筆ゐ多ゐ名ゐ俗火ゝもゝかゝ〻こハ俗文ゝ
螢火ゝ行る字をそめゝ〻ゐ仏ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ螢火ゝいゐ名ゐ即
ほ〻ゐゐてそ行る神代紀ゐ螢火光神ゝゐるを名ゐ〻ゐのかぐや
く神ゝようゐ〻ゐ俗ゝそハほ〻ゐ形をかぐやく神ゝそゝもべ名

夢代むゐゐ

夢をむゐゐ〻ゐゐゝいゐゝハ漢文ゐて自國のゝゐゐ代行〻代ゐべてむゐ
ゐ〻ゝハ他ゐゐゐ多ゐ人ゐぐ代或ゐ玄実或ハ門或ゐ星の入ゐ
ぐまぐ立ゐて追ゐをてそいへ〻ぐ居て結ゐをバむゐゐ〻ゐ〻ハ

いとうべ。絵をば。書はきるを。門口又は里の入口あづまぢまで。送る
ものの。ことばとて。むかふ。はなしハ。はいかい。老ハ。ことば。あるのこにてそ。ひ。
さやうの。遠る。物ハ。あるべし。顔ハ。老。賤。遠。春。ばかり。
清文。しるべく。歌を。清文の。格。あるべし。多ハ。ことば。文字。はまくあそ
よまぬ。ことば。ひ。ふこの。老。ひ。ふるこ。いふこ。ハ。後。老。ハ。俗語
ふもいひ。ふ。ハ。ふ。文。ふ。ふ。老。ふ。ハ。ふ。ふ。ふ

つぎ〳〵る句者て。さう〳〵
かくて。から〳〵ふる中〳〵いつるとハかし。さる句ようら〳〵ふ
ゝるも。上ある句よりつぎ〳〵る句をて。こゝ中ふゝかき中かゝやき。あゞか
上よつぎ〳〵る句をて。こゝ中ふゝかき中かゝやき。あゞか
わ〳〵よもゝそいゝ〳〵〳〵。ゆゞ〳〵きて〳〵しう。

義柴して

近き学いまゞ〳〵し人の学ふ。義柴してとよむて句。ふゝ
ゝと。かゝみゝ〳〵て〳〵ハいへど。義柴よして〳〵いて倒す。

今とかゝと　そふもかゝと

こと〳〵。今う今日うと〳〵ふて〳〵あて。から親のかし。と八行とも二つ
あゞ〳〵や中を先句て。と句し。ゝ学ふよゝ〳〵見て知べし。ゝ学〳〵

を近学ふ八。今と今日とと〳〵ふて〳〵ふよむハ。ゝとみゝゝ〳〵ゝ。

そうし

近学人。そふし。とゝ〳〵ゝ。ゝ学ん。そうし。ゝ〳〵ん。
〳〵し。ゝ八。ひこゝ。そうし。ゝ八。見ぬ八〳〵し。あゞの。ゝし。こゝて。ふを
そのゝ〳〵のそゞふをゝ〳〵ゝ。ゝ。ゝ。

きまくつべきかどの人々をうく此ものごとにうるハいふぞや。まちハ
きふ名とハ俗俗よ。まちがきまるといふかどのまち。まちやきやんハ。
まちがきとうまつぬといふこと。俗ふまちがきとといふべき事
を。まちがきまうまつぬといひ〳〵。笑ゆべしやハ。ゆゆ思べし。

神ふちかひ　光やまうく　塵よまぢつる

神祇の字ふ。祭をとよみ。又光やうく。蔭ふまぢつるなどよむこ
とハやゝ。ゆるくまうえて。者のうりかをどもとなづく神ふ祇をといい
ゆるくハ。ちかふなり。そハ佛のそまして。佛を本地とし。神をハそめ
垂跡といふうち。神をもと。えるとうく佛のまふして。佛のいひ細
をもうえるなどして。佛のうえにまへる時ハ。ふしをべくもむて
時まうも。又ものやうぐちうふまぢつるなどいふてもかを

老子といふかうぐ。和光同塵といふより出うるものなり。
神の佛うへまハまうふうるきこと。ものをこもも佛そこのことふ
ものべし。ものまうこ。やまをだまし。むけうん人をんをべし。

みとつふ　河を又四のこふいひうる

みうう　三輪　美玉　生などとべくみうこといふしあびハ。えを体
きにこそいひくべきこと。ものまと。えゆうこよハいひうけがし。みこの
こふてハ。えうこふこをあまゆえるなどのりどものてハ。えるこにハ
ものがうし。えるハごるとうこうるこをえうこと。えるこハ。うるこうこと
きへえるこうこふて。別うるまや。俗ふ近号よハ此差別なく。みこと
いふこと。えゆうまふいひうくハ。こうぐうなる。

嵐のいひうを

嵐を不省けとふいひうをゝ。ゆゝしきけしうけてつゝぐ　俗ゝ[illegible]つゝまい
ゝふとゝいふこゝろとしるべし。近き人の今はゝつゝもてつゝぐ
俗云ふ云いゝふもいひかゝるハみぢうし。

夕のいひうを

夕を云よいひうをゝハ妹ふみぢうし。たゝ俗ゝまちがひのいひうあざ
ふせぐうしふ。俗まづうひうぐまてゝもハ。俗まちがひのいひうけを。
やゝゆるくもふかゝをもてふうゝ俗よかゝぬを。夕とゝ云とハ。ゆゝ
いゝのゝとゝびゝるべいぞうはいひうをゝぎ

ゆゝづつまりけ句

ゆゝづつまりけ句ハ。ゆゝにゝもあゝを。

句の形ゝ。あいうおの四のゝぐづつゝる所ふかゝぎゝるこゝ形ゝ。
ゝゝゝゝ
ゝゝゝへゝ。ゝ。ゝ。

ある句ふつくゝとふかぶかの白りぐ行まうふて三の句ハ絶〳〵ぶとべて云〳〵
と思ふとつぐ〳〵ゑこハ些例多し かやう所ハとゝぐハ次の句へ
続くとし大うとゝぐ行まとハたのめ〳〵行いうおのゝつの内乃を
ぐのなうふかるる白ふあ〳〵ぞハよしまぐきし

ゝゝぐ

近き世の人乃好まてつゝふよりも猶ふ世ゝ〳〵ゝ仕ぐ作ゝと思
玄ゝまゝふ行つ先てゝゝふもゝ川ふいゝし。 寒風をぐふゆゝき
といふこと。 花よ一花といふて。 松樹をぐふるぶりるぶる。
花の句ふ用をきふふ句ゝといふこと。 うゝふとハよゝふ射とる事
行る時ふこゝいふべゝ意さいゝぐでもよゝ取ふこゝ行ゝとハゝる
ゝきりのし。 江ゝ入〳〵ふる〳〵みゝゝ〳〵ゝ〳〵ぐゝ〳〵ゝぐやゝふ。

行〳〵といひゝゝてゝよりれふかぐ〳〵のゝいひゝくハ世よかゝぬと。
〳〵の句〳〵の法ゝぐゝ考くゝ句ゝ。 七夕ゝ会に星合ゝ意星
の意味ゝぐゝよゝむゝ考のゝ句ゝ行ゝかゝぬを星やゝぐゝ星や
恨ゝる星やゝうゝゝきゝぐゝいふ星ハゝろし。 初ふゝ帆ゝくゝ
いふゝいぐ。ゝくゝハいふゝゝふゝ行ふゝふゝ行ふ行ふ行ふ行ふ
ゝゝゝそハ横ゝ世くゝ引ゝ西ゝよゝゝそいへ帆ゝぐのやゝふ上へゝゝ行ぐ
ふを引ゝゝはいひぐゝ〳〵又帆を行ぐゝゝゝ船を引くゝをいふゝそ
きゝもいぐ行ぐゝゝそ帆の用ゝれゝをかきて引ゝゝ紙のゝいふべきこ
ふいふゝぐ。 納涼の句ふゝゝぐゝゝゝ

てよきゝんを。そづゝしくゝるを。べ。是ど。近ゝふハ。人毎ふもむ
ふぐふいとうるはし。をべゝかゝやうはすハ。人の一ゝびよをゝん
ゝふゝとハよもむべきあうゝぐるをや。　号はゝふ。外よゝあこびも。
耳かしゝるし。　鐘をきゝ。面をきゝ。ねど。そのいひざゝふもて。
海文をくゝとゝるを。ゝぐふ鐘きゝ。面きゝ。ゝぐよしハ。ゝふゝ
し。　えよや。蝦のゝ色。蔭ぐえ。ゝるゝいやしゝ。ゝるゝ泊し。
接衣のゝふ。ゝれゝへをといふも。ゝよかゝび。　号といひてめど
のゝゝゝぬ時。番相とよしてゝ。古ゝ。ゝぬ泊し。　山窓風と簾ゝ
をおゝ心。ゝふゝゝるゝき泊を。近ゝをきゝて。ゝる。　松を
接も。或ハ松ゝも接ゝもゝをゝゝべきゝゝいひゝゝれまゝゝ。
松も接ゝもといふゝ。ゝとゝゝ。ゝゝゝゝ又ゝゝまゝて。ゝんかゝをゝげ

ふきゝゝゝ。　ゝゝきかゝやといふゝむゝをゝゝとゝゝきゝゝゝき言がゝ、
といふゝゝゝ。ゝんゝゝゝ。　右の泊ゝと。ゝゝがゝとふいゝゝゝ。
ゝ。近き号をきゝて。ゝゝゝし。此ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ多ゝゝべし。

いやしきをゝゝ白

ゝよゝゝ。ゝよゝゝ。月こよひ。月むゝ。松ひゝ。ゝゝゝや。
ゝふゝよ。ゝゝふゝよ。をゝむゝよ。思へ人。ゝゝゝ人。ゝゝゝいや
ゝゝゝゝ白ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝきゝふハ。ゝをゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よるとゝぐ　ふつゝ　ゝ　ハ　ゝ　ハ　ゝ　ゝ　ゝ

いふぞや。近くよみ出でたるとハいづれとうはきそとなほそうら
まうぞ。ものと。又いろふかりしうきこゝろの詞をもあぢひ多く。老人ま
ふうりぬるとバ。ゆくゝふうるはくまへ。笑ゆとバかりぐ。はゞ老ぬ
しのしくゝ。ふし。いやをんうきそぐうと。まして。よはしくをつくぬ
ゆ。ぬ。うゝやまゝぎふうりてよむをかへをぐ。ゝづきかし。

文の詞を言ふよむ事

ほゞき雅言（ミヤビゴト）より中ふし。文まふ開ぬゝ。言ふハよむまゞ。ぬと多ゝ。
ゐゝへを。ぬゝをや。ぬ。をゞいふてハ。雅ゝながゝし。言ふハよゐぬ詞
ゐうとをぐゝ。ゆゝのゝをば。たゝのよゐ言ふハ。ゐぐき。むづき。ゐ言ふ
どのゝよゝて。ゆゝといふてハ。或ゐまゞふゝとゐを。天の詞ゞて
ゐどやゝふ。詞を踊（ヲドル）ゆゝるゐぶよをてゝよみゝをゞふぬゝ

とハ。をくゝよゐ。ぬ。ゆ。ゐ。ゐ。ゐ

ぬがふかきぬきくくさくさえるにまへで先づくらしと先で考へ
しいふをるハかへさぐくとかるいいくく。

文の部

文くさくらふる文くくとくくく

きこゆ。俗文の仮つきを用ひて、まぎらかしおくハかへそぐ、えぐ、
ふしきこゆぞかし。雅言(みやびことば)成ぞ、げ、むよハ、ゆとふ古俗文のゆゑ
なるべんよりハ、俗言(さとびことば)なるべし。ゆゑ、ことをよりてなる。
ふ云ふ云ふ多く仮名を書よりは俗文の本の語なるべ
き助辞なるべ。ばなりもべきふ仮名。まして皇国乃文よかくべきなるは。

人

近き人帝は絶えまがるべ。かのあしきぢむる語をやいはんは
らむ。そハ此国をいうなることと思へるふらいとくんはぞ。語なるしハ。俗語
ふかのでなくうとふまじ。ゆふふみづくいひまうをして。語
でなくうとまそぎふいひくよかるんやと。

二つの身三つの身

今の人文のふるふまゆのを考して。元身成ぞめのうと

かくハ出るもはし。二身三身おどを。物ふつのうくみつのうくあどがく
ことハ中昔の文ことと例をなるまど。皇国の語いひまるふ仮名。
あるまさやうふいひてハ。身の二つ三つなるふ物ふしまへを二つの目
あつの指といへど。月二つ指あつのまふ仮名やや。又寛政の三つのうく
といへど。寛政といふくの。三寛乃時なる笑ゆるをや。されバ二身三
身あどをあふ。ふまとといふくみませといふうくやうふかくべ
くうくまくのとふかくバ。いひの物ふまとせといひ身みませと
いひくうくあどを出べしかなぞ。ゆふ。

菜ぐいふ

菜ぐとなる。菜ぐ。菜ぐ。菜ぐいふ
近きこゆの人文のふるふ。こづくうくふ。菜ぐ。菜ぐ。菜ぐいふ
とかく。此がゆ。ゆがおくもゆ。此国をおくべきそふふかくうくべ

てのゝいひがゝいふてハ所よりて所をゝて考くて思ひのか
ふつうひふらき詞ある様近き人その味をとゝぶらかゝ所ゝみゞ
是ゝ考ゝとゝ思ふ所ゝ

おのゝ葉

近きころ世人文の中ゝ所ゝ所ゝ所

きべて人のなをいひ出るよハ或ハ某ハ某ハ某といふ人ありて或
ハ某ハ某といひ者ハ云々などいふべきを近きころの人の文
ハ某なる人云々某なる老のうへなどかく代名詞といふ類ひを
しき侵し也漢文の近年の洲兵ハ有某者と陪臣を記すの
ひとつ出そ也なる漢文ハ洲兵ハトイフを侵付
て有某者とよめることぞ正しきなるを近年の人なま
ちらふひて云々ハ某ハ某ハ某なるを近年の人なま
ちらふひて云々ハ某ハ某ハ某なるとぞ
ちらふよもとそ ナルモノとハ陪臣なるとぞ
ちらふよもとそ ナルモノとハ陪臣なるとぞ
ちらふよもとそ ナルモノとハ陪臣

西をのといふをきをわきやうあんはとをくハ中とふ心がこころえし。
但しこも話よりてハ年よりを西の人をも好といふまぢれあと
うしぬ今ハこゝを大ををいふよなん。

友うき　友ぞち

今ゝ人友ぞちといふをバ偖ゝとやこうちうしを多く友うき又
友ぞちとかく。こゝ中こふこうろし。古き集の仮名又西流をぞかも。
皆友ぞちとこそいひしを。友うきハ古とやうゝ又友ぞちといふを。
をぞうを。をゝうぞちといふを。偖云ふぞゝしといふて和をバをを
あくて。をぞ友のをゝふ。友ぞちとハいふべきふかゝゝぞ。

おかきみ

大きゝとハまゝ。むゝとハ天皇況た。皇ゝ偖てハ親王偖王ふゝを

ゝて必皇亂ふゝて。偖下の氏をうぞる人ふかぎうて中に偖王も。
いふ貴しゝといへどゝ。偖下ゝ氏をる人をバ中世をもおし。偖
偖を今の人の文ふハいをゝかゝとゝ。ゝかゝとゝ。ゝ中ゝ
ふ大君とかくハ。ゝかゝ。ゝこゝ。ゝき。ゝぞゝ。ゝを。

かゝを

妹ぞゝを君かゝうあどいふかゝをハ。偖ゝといふゝをゝ。ゝを知ゝを
あど。偖ゝを。ふ。ゝ。ゝあゝ。ゝかゝ。ゝへゝといふゝふのゝをゝつゝひゝく。ゝかゝよ
ゝゝといふゝをハ。偖ゝし。ゝゝ。ゝ。ゝ。

がてら物を今の人に見せ侍らんとて、いふを聞きて、
こへゆくゝやうかくてゝうはよがてら、
　　　

かうぢ古古日記ふ[illegible]る人わざ[illegible]はかせみ[illegible]とうるも貴
くこと[illegible]古佐の[illegible]ちふて[illegible]うし[illegible]ほどといつ[illegible]大[illegible]こ[illegible]ふて[illegible]ん
はべし[illegible]ふ[illegible]伝と[illegible]く田舎をいて例[illegible]ふ[illegible]縣のりとの者
きるハ古事紀伝成撰[illegible]の伊[illegible]ふいへ[illegible]

いづる　むさし

今の世の人、江戸ふゆくこと或ハいづまふまかりる或ハむさし
ふりくだり給ふ[illegible]ハ[illegible]ろし、これ江戸といふ名を[illegible]給ふや
うに思ひてなきれど、地名ハ[illegible]ハ[illegible]ひまさしく
江戸をさしてふとふ[illegible]江戸とかくことよろし[illegible]事ハ[illegible]ふ
[illegible]ろく[illegible]ひて[illegible]ハ[illegible]ふべ[illegible]ど[illegible]も[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]ろし、又武蔵[illegible]

とかくハ結ふ[illegible]し、今ハ夫の下ふ二つなき大江戸をふ[illegible]名をた
きて、ふの名をしもふべきことふうぞ、[illegible]ハ[illegible]人も[illegible]ふ
ぢ[illegible]ふ[illegible]ハいとまぢうしをや。

いづぶ

今の人の文ふ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]ぶ

人のうきゝ地をえまバ、孫の日記のことゞ、絵いてうを、いみしれ
ぬこゝ形なり。

川をうたゝ

山をうゝ西といひ、川ハ隅るといふ。ぞうぢまり形ら、孫ゝ今の人、孫
孫の日記などゝ、系川をこゝて形どかくハ、ゆみしき、むげなゝ、今孫
の人をかち、ゝ形ら、ゝでハ、ゝ、ゝとハいゝまど、むゝ、海川を捨ゝ
き、ゝ形ふまれ、伝ゝ、ゝ、ゝとゝ、ひつゝ、又、山ハ、ゝ、少
といへゝ、ゝ、ゝ、

うぶきといふてかしこまべく漢字の訓ふまて何乃至代後さこと此ものぐひいてかゝ〻らうまべし

いさほし

近きころ世人古書ふかう珍字などをいきりしとまみづうつ世文字も然かくこと侵しいさをとゝ雅ぞ正しく代そもをいさをしといふもをもうかして用ふいふ所のことふこそいと驚ふいふ所もいさをしとゝへで意を雅ふいへをこひまをおひしといふ所をらかして用ふいふときのことをて世ふこと同格の個し然ば雅ふいふときいさをいふとおどいふべきをいさをしいふとしいもんを意をもるといふをこひしをるといもむる用ぐ意がとしし又彼家も之代実係の中は宣命ふ見て世ふとをゝ

おもい仰とかくこと也語多重

うゝふ

うゝふといふを俗うふまふ訓ふと云ふ事うみの事也式ふふるゝといふとし然也変つゝひやうけあう何まで〻と〻で俗使ふまふふ〻ハ平安ふ訓ふ〻ハ出平安ふ〻ハ出平安ふ〻ハ出平安

ちらふぬむしを。ゑがてくこまてゝハ。畑俣。ゑどゝかも。有てからゝ
ぞ。ゑつき。何ゝ。ゝいふまハ。ゝ。ゝ。ゝ

結るといふ詞をつらねべき文とつゞみぞうまハらふ
まゞきゝじきなれきこえハ人と對して敬ひていふ倍の内の已ぐう
へよつきるるるふ添ていふ詞そゝるゝを「奄の花と見給りてよ
結るといふを倍ふ倍ふ奄の花むをえまして　よみまして　ござりまえ
といふ詞ゞ結ハけ倍倍のまして　といひ　ござりまして　といふう
ゝるまりはきバ人のりやふいひやふ文ゞまハゝるも出べし
ゝを結るといふべうゝべゝまもゝゝゝ結文章ハ一つもかゝべ
きふゝうゝべ結ゝを近世人のかゝ行のゝ記まも結ゝみぞうふ結る
結るとかゝハ人ゞ奴僕をゞふ對してもゝ花をえまして
まてござりまをといひ文ゞゝういふ結るも結いゝんがやゝ
をゝゝかゝゞやゝこをあ行詞ゝのゝ結ゝべゝまゝ行の文ゝも

右のゝ行あるべきゝおきゝ倍倍ゞとをえべゝ此詞ゝ人と人と倍
倍倍の内ハいくつたちゝ言まうて多ゝ有てゝゞ地の倍ゝをゝ
より下ゞ為ゞる者奴僕ゞふゞふ對してゝいふ倍をゞふハ一つもなゝるゝ
ゝ結ゝゝゝゝゝゝ倍ゝまて考ゝべゝ拾遺ゝ人のゝ詞をみぞ
ゝに結ゝてハ代ゝの撰集乃詞書ふなゝゝゝゝゝゝ撰集ハ
おゝゝゝゝふゝ倍ゝまハ撰者ゝゝみゞゞふ對ひゝまして申ゝをん
ゞへを結て此詞をバゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ古今集の詞書ハゝゝ
ゝゝ後撰集ゝまとこゝゝゝいとゝゝゝゝゝ申ゝ結書ゝ集ゝ花山
の帝ゝ結ゝ自撰ゝゝゝゝゝゝふ此詞のゝまうハゝゝの集ハ結結
撰ゝまとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てたるもかしこし又新古とも素は後鳥羽院みこどもは自撰のぢやう
なるゆゑもはべる歌の多きはこれらのうちひきぐぶいろうてはべるやくかく
伝とぐびの歌づくひをどもとくとくかくびをうてしぐさきぐれ素
どもの御乃まきふかくきとうとぞこまるぢてみるとくとくのあく
の素をなどをとくふ言ごとふけ歌あるとこ一素のうちふとをとく
なきとしがいうはべ些歌なきはべるべくかき素をあきてる素
多くいうはべおやをふなやをふなやをうなり又ちくでも老人へきて陽炎ぜき
せしなどなるべし古きを素なはべるとけまぢをとをとる
今は芳の物をひとはづまびは古況をとうん人をとれまへあるべき
ものをふなるも

結ふ結ふ

結ふとは行くとまる人よつきていふ歌結ふはべる人よつきていふこ
とばし結ふはべ結ふ結ふ結ふ

ふうをふとかくと見るし。見て考ふ使ハう沈用ふなき
俗し。つかうまつるなどと。ふをかくハ見るし。後考使の考しれす
さ。おのが儒家之考ハいつう考へえべし。

つかうまつる　つかうまつる

つかうまつるとつかうまつるとも。元ハ俗ふとあはらとの考ちめ如ぶとくふ
て。使うまつるハや俗人よつきていふ何。俗云ふもやるといふ行こまう。つかうまつるハゆく
人よつきていふ何ま。被遣ハさるる。俗云ふ使よゆくといふさとなると。物ら沈こと也今の
人ま。ふれまくく。使うまつるとも。ふでつかうまつるをそまて。ふ紙く
ふ行て。ふ文ぜ。紫ま。ふ紙ら。ふ文を。使うまつる。ふ紙ど出
を。使し。此紙ま。ふ文ひ考人のふへまし。ふでは。ふ。きふ。ぶと
つふ例。ふうちき書ま。ふ文を見て知べし。つかうまつる。ふ。或ハつかうまつる。

ぶ文どハいをなまし。物を賜ふ事沈ふ用ひ。物を賜ふ儀
といひくハ。ふの使よゆく者ま。ふ物を賜ふ。又物を賜ふをさいへむ。ち
物のふへをいふ。ふ。

こまを

おこまをふ。おこせ。沈おせ。とふ。いやし。沈ふ。物を
今の人をかつて。おこまを。おこせ。を俗。ふ。ふ。ふ

[illegible]おもしまいかどいふべきを。おもしませしといふべきなり。
[illegible]べし。生しハ生まし[illegible]といふ俗なり。ませしハ俗し。
[illegible]

数ひ泊よあふ[illegible]といふなり。素良泊おの文ハ。坐[illegible]といふなれども多
し。来給ふを[illegible]まして入あふを入まんがつり給ふを[illegible]かつまなといへ
ハ[illegible]ぐひし。給もぐどもこと[illegible]ハ[illegible]事にもて給いてなて。おぐく
給るをハ[illegible]ば。御[illegible]給ふさ[illegible]給ふ給ぐのようび。上古より
[illegible]給ふといふなれども多し。[illegible]をのりまて中[illegible]給ふ
おどいつる俗なり。給ふ武泊きこと古学ものとをかく。文をよひて
給る給ふもしまして[illegible]給ふといふべき不をと皆。まれ[illegible]
[illegible]給ふ古文の例よ遠泊[illegible]。[illegible]古代の泊づひ

を[illegible]ぬ[illegible]ぐ[illegible]おとひて給るかしこ[illegible]ハ。文も歌
もいとく[illegible]ものぞかし。
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]といふ[illegible]ハ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ひ。[illegible]給ぐ[illegible]ハ。
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

ゆ

物をたしていふ時はバ所べくの俗よハ引べきかなり。

ゆ

ゆとといふこと成。茶茶ゆどの字ハ。ゆゆとよるとよまるる美しいこれ
よりて。近きころの人。文をゆとよりといふべきなと。皆ゆゆとかくハ
ろし。古へ。ゆとの字ハ。文よハ皆ゆとといひ。ゆゆよりといふ
こと成し。俗言を古語の事。論ずるかやうの事なきぬ用をぬ
こして。多くかくハゆとんづき所かくべきなり。

と

紫書ハいとく。こといふ。紫人の語をハこく。語をかく

のぬく上よいとくといひ。或ハ語をハなどやうハいひても。其語
の終をハ文といふ。と語ハ皆。あどいはぬぞ。むし。此文の定まりなりき
俗語をけ。後の人の文ハ上よいとくといひて。終をハ文といふ
あどいハぬ。ばじ。なとをかりて。ばじく。掛しなや思ふん。終
をバ。とくのくいひく。法の語へなつるハ。後世人のなまちうらに
て。古への俗よりあがつるのなるべし。とくのをるてハ。法の語へもうつりかな
くらぢ色ハ。ものがくらぢ。いみしき。ものがくしとべく。近き
て。後の人。文をきとくぬよみじかく書くをようにこく。人ハとめ
とどけて。中くふとぶきとして。俗のとくのハぬとし。此ハ。ハうも
特おかきぞうし。漢文ハ。某曰云くと。主俗の終をトとく。点を附るもの。
こまも近きころのまくをかけ。おき例点ハトイフと
よみつきこと。古へ語の格をかけ。ひがてをもべきふかしぞ。
ふかくひて。ひがてをもべきふかしぞ。

から

古今集序に詞は文字にて表はし、言は心の種にして、よろづの事につけて、言ひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞くに、いきとしいけるもの、いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも、あはれと思はせ、男女の仲をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり。

ひらがなを、しもべうき形とりれば、意五ぱいのはあしでかいしひ

まくらきをむ月の十日ごろふる、又なるとひらの新古紀貫之

ぎむそをにそみ、きるを、恨ひるるつりて、こ、ろ、のりをめさ

ぐひのをめぐ、今の人の文をまバ必ず、がといふ所しらやうの所とが

といつるこゝろ、やゝむちゝの西ふもこゝまぐ、たのよう紀文をハ皆を

といつる、物ゝ紀今時の人をかやうに所をとをといふべきことをバまさ

きまちぐ、て、皆がこのこゝろ雅（ミヤビ）に通（サトビコト）ずこと

高は詞出、さゝね猛くの文をとつふよくつるこゝしんはかく

べし、はがりぐ一つまて、大うこゝを文のつゝかさもまゝまゝぐ

きべこゝがといふ詞を別ふつゝひどゝろつゝを、右のめくまる所よハづハ

ねてこゝ、そのきぐめ代いまをむよハふゝるもをまバめゝしつ、古めか

よ紀文ぐとをよくえて、うぐゝひ知べし。

よるとて

よるとてハこゝのこゝふよるゝてと、上よ詞をまてつぎをいふこゝ、河乃

頭よゝぐよるとてといふと所、そゝ上所る語をバ切て、次て語

をかうていふきハこゝまふよるゝてといべし。しるこゝぐ上ゝうつ

づきていふ所を、日も書ゆるふよるて、ぐどゝぬゝといふを、上を切て

いふゝきハ、日ともぬこゝまふよるてやどゝぬゝいふゝぐひゝ所

を近きこゝろの人を、日をとをぬ、よるてやどゝぬゝやゝふ、上乃

語の切をゝる不よ、よるてといふを、俗文ぬゝの初ぐゝこゝ俗

の須づひよるゆづり。

ゆゑふ

ゆゑふ。よりてとは。ほどまもなくて。上を切て。おうていふと

きハこのゆゑふ。ゆゑふ。ゆゑよりいふべし。詞のかしらふ。ゆゑよりといふべきふうにて。古文にてハ。語のかしらふてハ。が。を。といひて故字を書と。文体文の。句のかしらふある故字ハ。昔よりかるがゆゑふと訓。事ハ。こゝ。ら。を。が。体がゆゑふ。つゝふてし。やうふよゑゝる。も。語のうしらふ。ゝ。ふゆゑふよりとハいふまできがゆゑし。若ハ。体文をよむよりも。が。く。須のつゝひさるを。ぶ。して。ぶの。ごゝみぐうにそうゝぎうき。

のゝ

のゝとハ。ゝ。ぶ。ゝ。ま。ゝ。ま。ゝ。ぐ。うふして。おうの物おうの事ハまぐら。ぐ。須。いふ。須。ある。を。迫。きこゝろの人乃文ハ。ゝ。ゝ。ぶ。ゝ。ぐ。語の勢ひよ。のみ。いひそぢむ。ゝ。ま。き。ハ。体文よ。ゝ。ゝ。へ。ひぐ

あとし。大。うゝ。皇。玉の語ハ。ゝ。やうふの。ゝ。といひて。ゝ。ぐ。むる。体ハ。ゝ。ぶ。きゝ。古。き。ゝ。ふ。ゝ。ぐ。一。ゝ。の。ゝ。ゝ。ぐ。一。人。の。ゝ。ゝ。ぶ。ど。ゝ。ゝ。ぶ。ゝ。ぐ。ゝ。ぶ。ゝ。ぐ。ゝ。ぶ。ゝ。ぐ

なゝひて。皇國の文字を。まなとゝいふべき所。そのうへとゝいふべき
そゝ絲をどと。うつゝといふて。近きころ多し。然いひても。萬
やう好きぞと。そもそも又うけ近き所の傳文訓ミ多くは。ゝゝ耳
よゝそのまゝ。ゝべて。其のなゝひて。やすしぬることゝ。耳好きぬるバ。
さてしやすゝる所ぞかし。

いやゝ

いとゝ。ゝゝ。いとゝ。いとつゝし。ゝゝ。ゝゝいとハつゝひやゝのうる泪し。ゝゝ
ぞいとゝ。ゝゝ。ゝゝかゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ

のゝしりいと美し。今ハ異ひ物ゝふ。こゝ二つ三つを略す。但し、
文ハ、ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

ても、俗語を用ることも多分なれバ、古のをよく考へてかくべし。今の人の文よハ、ちゑ、ふゞひの心ゞこゝろ、いと多きぞかし。

俗文畑「正」の文

近世人の文よ、おとちゝ、ふ俗文の、ふりをぬけ、まくかきまゞふる、ものよう、流ときゞ、そハ、ゆゑ雅文をえざるかゝ、ちゝ、ふ、てゝ、つゝ、ゆゑをまぎゝかうん、そゝ、ゆゑ、ゝの俗文、ものゞ、の顛倒、助字、ゆゑ、かきやゝ、ゆゑ、ゝ、ゆゑ、ゝ、ゆゑ、

寛政四年壬子春發行

勢州書林　松坂日野町　柏屋兵助

京都書林　二条通柳馬場東入町　林伊兵衛

寺町通四条上ル町　錢屋利兵衛

本居先生著述書之内板行出来　松阪　文海堂　皇都　華箋堂

字音かなづかひ　全部一冊　是ハ本朝の字音の事と委細ニ論ト考ヘホ有ル書なり

漢字三音考　全部一冊　是ハ長音漢音并ニ唐音のことを論ず附録ハ音便の格のことなり

玉鉾百首　全部一冊　是ハ古の人の意と古風の事百首ヨミ記レタル書なり

國號考　全部一冊　是ハ国号の訳とくわしく考へしるしたる書

眞暦考　全部一冊　是ハいまゝ異國の暦法の法を考へ古の年月日の定めを考へしるしたる書

菅笠の日記　全部二冊　是ハ吉野花見の時の紀行なり

言葉の玉ボコ緒　全部七冊　是ハてふとのことを委くしるしたる書

てふとは　紐綾文化再刻　折本一冊　是ハてふとの定まりと固ハ古くしるしたる書

大秡詞後釋　全部二冊　是ハいにしへの中臣祓の注

むらくも　全部一冊　是ハ行基文の用ヒ様ヲ説て撰ミ表りたる書と正一又ハ一二ハ相と数へたる書なり

神代紀うぶ玖山蔭　全部一冊　折代巻ヒモム舞ヒ考ヘたる書なり　折刻出来

玉鉾百首解　全部二冊　門人稲掛大平作　全部二冊　新刻出来

詞のやちまた　全部二冊　是ハ羽の活用の格をとゝのへ例を挙ケ事ヒ考ヘ書なり

まくら花山櫻花三百首　全部一冊

寛政十一年己未初秋　發行書林　勢州松坂日野町　柏屋兵助　京都三条通冨小路東入ル町　錢屋利兵衛